

校註

日本文學大系

第十一卷



大正十四年十二月二十五日印刷
大正十四年十二月二十八日發行

(非賣品)

日本文大學系

第十卷

編輯者兼
發行者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

右代表者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

中塚榮次郎

印刷者

東京市本所區番場町四番地

守岡功

印刷所

東京市本所區番場町四番地

凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座 七八三番
振替東京 五二二九八番

例 言

- 一、本卷は榮華物語四十一卷を収めました。
- 一、本卷は石川佐久太郎が擔當しました。
- 一、本書は小中村清矩氏の校本をもとし、和田英松、佐藤球兩氏の榮華物語詳解、竝に國史大系本、史籍集覽本等を参照校訂しました。
- 一、卷末に添へた系圖は重修榮華物語系圖をもとし、榮華物語詳解其他二三を参照して増訂しました。

解題

文學博士 尾 上 八 郎

榮華物語

平安朝時代の初期に、伊勢、竹取等の諸物語が出てから、前者の浪漫主義傾向、後者の寫實主義傾向が、相混交して、うつほ物語の大冊をも出したが、漸次後者が勢力を得て、前者を壓し、大和、落窪等の諸物語が出た。これらが基礎となつて、源氏物語の大作があらはれた、これによつて、物語は上るべき頂點にまで達したのであつた。この一つがあつて、從來の寫實主義が行くべきところに行き著き、浪漫主義も當時の人の満足し得る處に達したのであつて、綜合統一の妙は、こゝに極まつてしまつた。これによつて、この後に出てくるものは、いづれも唯、その餘唾を啜り、後塵を拜するに過ぎない有様であつた。狹衣は、その中で注意に價する名篇であるが、猶及ばざること遠いものである。ねざめ、古本のとりかへばや、濱松中納言などの物語も、順次に

現はれるが、皆及ばない。すべて、源氏物語以前に源氏物語なきと等しく、源氏物語以後にも、源氏物語はないのである。

然し、これらの作者は、いづれも相當の苦心をして、何等かの點で、源氏物語の上に出ようとあせつてゐる。狹衣の大將も、源氏大將と異なつた行方をして、帝位に上り、とりかへばやの兄妹は、奇怪な舉動をして、遂に各自の性に反り、濱松中納言の主人公は支那まで行つて活動し、支那と日本とを一つにした如き結果を呈せしめてゐる。すべて作者は、趣向を變へ、舞臺を廣くして、世人を瞠目驚嘆せしめ、社會の喝采を得ようとしてゐる。その方面の天才ならば、或は源氏の上にも出る事であらうが、これに追隨する事も、普通人では、すでに困難になつて來た。この故に、こゝに、入るに易く行ふに難くない、然も從來の範疇を殆んど全く離れて、新生面を拓いたものが、自づから案出せられた。これが、假作架空の物語を出た事實直寫の物語が行はれ出した所以である。乃ち榮華物語や、大鏡が胚胎し、而して出現した所以である。

從來の物語とても、決して全然假作架空の產物ではない。根據となつた事實、又その添加となつた事件が、過去にもあり又現在にもある。それらを混融した上に、多量の想像の分子を加へて作り上げたのである。故に、結果としては、猶假作架空の物語と稱すべきである。ところが、

こゝに現はれた物語は、事實そのものを中心とし、それを、特に變改せず、修飾せず、たゞそれに少量の想像の分子を加へて作り出したのである。前者は想像に即し、後者は事實に即する。兩者の差異のこゝに存するとともに、文學上の差異も、またこゝに存する、乃ち、想像より事實に墮し來つたことは、價值の、高きより低きに墮し來つた事である。

しかし、當時の世相は、自づから好個の物語であつた。藤原氏の隆盛は、まことに類のないものであつたが、まゝならぬ世は、何人にも永久の喜はあらしめず、惱の雲は始終襲ひかゝり、争の種は斷えず蒔かれてゐた。それによつて起る、愁ひ、嘆き、争ひ、怒り、悶え等は、描き來れば一幅の繪であり、敘し去れば一篇の詩である。その中で御堂殿の榮華の有様は、喜見城の樂しみも如かぬが如くにも見えるが、猶浮世の羈絆は脱する事が出來ず、「望月の缺けたる事もな」い間から、涙の雨の降るのも多かつた。この光の中に悶があり、榮の間に悲しみがあり、錯雜混交自からの技巧と、變化とを盡してゐるところは、天成の物語であらねばならぬ。ことに、御堂殿の、伊周の一系を壓して、女子を後宮に納れ、男子を要職に居らしめ、三代の天皇の外戚として、無上の榮耀を極めるのみならず、よく臣下を愛撫し、氏族に篤く、恩頼を他に光被せしめたのは、さながら光源氏そのまゝである。この人を中心として書けば、自づからなる源氏物語は出

來る譯である。むづかしく趣向を考へ技巧を凝すよりは、これを直寫するのが、容易にして、然も疑ない成功の手段であらねばならぬ。當時の才人が、材をこゝに求めたのは、賢明であるが、しかし實は自然の成行である。

從來、事實直寫の物語はないのではない。古くは、古事記から六國史、新國史（これは傳はらない。）類聚國史等の國史も、技巧を加へずして、事實を直寫したものであるから、これらも、物語とも云つていい。しかしこれらは、古事記の外は、皆漢文である。古事記は、この中で別體をなしてゐるものであるが、猶平安朝當時の散文とは趣を異にしてゐる。日本書紀以來、國史は、必ず漢文を以て記すべきものといふ不文律が作られてゐたが、漢文操縱の術が次第に衰へて、假名文が盛んになり、日本的意識が明瞭となると共に、日本の事實の直寫は、必ず日本語ならざるべからざることになつた。この形勢は、また自づから、漢文ならざる假名文の國史を出さしめようとして來た、發達の頂上に達して、趣向の變化と、舞臺の擴張とに屈託した物語の作者が、世相のさながら好個の物語であるものを見たとともに、この形勢に順應して、こゝに榮華物語、大鏡を作り出したのである。

以上の如く、假名文の國史は、行き詰まつた物語が、趣味多い世相を、從來の漢文の國史の跡

を追うて、日本的に記述すべく、一轉折して出來上つたものである。然して、列傳體によつたものが大鏡であり、編年體を取つたものが榮華物語である。しかも、この後者は尢然たる大冊で、源氏物語に次いだ力作である。

榮華物語は、また世繼とも云つた。袋草紙に、萬葉集は、孝謙天皇の時の敕撰と云ふ事を云ふ處に、「或人云、如云世繼物語、萬葉集ハ、高野御時諸兄大臣奉之撰。」とあるのは、「月の宴」に、萬葉集は、孝謙天皇の時撰ばれたと云ふのを指すのであるから、この世繼物語は、榮華を指したものである。十訓抄にも、伊周と隆家とが相談して、花山天皇を射奉つたことを書いて、「これら精しくは世繼にみゆ。」とあるのも、「見はてぬ夢」にあることであるから、この世繼も、榮華を指したものである。大鏡の流布本の卷四の終に、「世繼」の名と書いて、目録がある。これが、榮華の目録であるから、この世繼も、また榮華を指したものである。この外、増鏡の序にも、本朝書籍目録にも、「世繼」とあるのは、共に榮華を指したものである。かく、この榮華を世繼と云つてゐるに對して、大鏡をも、しか稱してゐるのである。乃ち、中古歌仙三十六人傳の曾根好忠の傳に、「世繼物語云、圓融院の、紫野ノ子ノ日ノ日。」とあるのは、榮華ならずして大鏡の事である。塙囊抄に、「世繼の大鏡」とあるのは、云ふまでもなく大鏡である。此の如くであるから、單に世

繼と云つては、榮華だか、大鏡だか、判然しないのであるが、元來、世繼といふのは、伴信友の云ふが如く、「御世々々の事を、繼々に語るうへの詞なるを、そを書しるせる書どもの、なべての名にもいへり。」であるから、時には榮華にも、時には大鏡に適用したものと見える。しかも榮華に用ひたところの多いのを見ると、主として榮華と云つたらしく思はれる。

その榮華といふ意は、九卷本に、「うたがひ」に、「此の殿の御前の御榮花のみこそ、ひらけはじめにしより後、千年の春の霞、秋の霧にもたちかくされず、風も動きなくして枝ならさねば、かをりまさり、世にありがたくめでたき事、優曇華の如く、水に生ひたる花の、青き蓮の、世にすぐれてにほひならびなきが如し。」とあるのに據つたものだと云つて居るが、猶まだ、他の「つほみ花」の卷にも、「春宮の生まれ給へりしを、殿の御前の御初孫にて、榮華の初花と聞えたるに。」また、「……これを勝地といふなりけり。これを、榮華とは云ふにこそあめれ。」とあるのにも、據るべきであらう。すべて藤原道長の榮華の有様を記さうとするのが、主眼であるから、かく稱するに到つたのは云ふまでもない事である。

卷数は四十、「月宴」の卷から、「紫野」に到る。九卷本の目録に大畧記してあるが、まづ最初の「月宴」は、「鳥邊野」「いはかけ」「音樂」「御裳著」等とともに、卷中の事實によつて名づけた

もの、次の「花山」の巻は、「様々の悦」、「見はてぬ夢」、「かゞやく藤壺」、「苔花」等とともに、文の詞によつて名づけたもの、更にその次の「浦々の別」は、「日蔭の鬢」、「玉の村菊」、「木綿四手」、「淺緑」等とともに、歌の句を取つたものである。この三種類のある中で、歌の句によつたものの最も多いことは、歌が、文學の中心をなして居る時代を、よく表明してゐる。

この書は、上下二篇に分つべきものであるといふことを、契沖が始めて云ひ出した。それは、「月宴」から「鶴林」まで三十巻を一羣、「殿上花見」から「紫野」までの十巻を一羣としたのである。その贊成者は、頗る多く、伴信友も比古婆衣に精しく論じてゐる。それは、第一、「鶴林」の末に、萬壽四年十二月四日に、道長が薨去する。その後のことを、あくる五年の二月のころかけて、上下の人々の歎く有様、また世の有様を述べつゝけて、「つぎ／＼のありさまでも、またまたあるべし。見聞きたまふらむ人も書き續けたまへかし。」と書いてゐる。そして又筆を起して、「御堂の百體の觀音、阿彌陀堂にぞやどり居させたまふめる……あるじさらせたまへる御堂急がせたまふ。御はてにやがて供養とぞおほしめしたる。」と書きさしたごとくに筆をとめて一篇をはつてゐる。これが、榮華物語と名づけた意に叶つて聞えるのであると云つてゐる。第二、この「鶴林」といふ巻の名は、道長葬送の時、忠命内供が、「けぶりたえ雪ふりしける鳥邊野は鶴

林のこゝちこそすれ。」と詠んだ歌によつたのである。鶴林は、釋迦の死んだところから出て來てゐる。これで筆を絶つたのに、作者の佛道によつた深い用意が見えて居る。乃ち、道長の死が、釋迦の死に似てゐるので、こゝで終筆したといふのである。然も、又、大鏡に、世繼の目錄として載せてゐるのが、こゝまであるのに合はしてゐると云ふ。第三に、「うたがひ」に「御堂供養、寛弘二年十月十九日より三昧のとしびを消たすか、けつくすべくば、此の火とく出づべしとのたまはせてうたせたまひしに、その火一度に出でて、この二十よ年いまだ消えず。」と云つてある二十よ年は二十四年で、「鶴林」に、書きとめた萬壽五年までの年數に叶つてゐる。これも、心してかやうに書いたものであるといふ。この中の、第一は殊に的確で、後人の見聞を書き繼げよと云つて居るのは、動かすべからざるものである。信友は、更にこれに次いで、第四、「殿上花見」の卷に、「高松殿の御腹には、春宮大夫、中宮權大夫、權大納言など申して、をとこ三人おはしますなり。姫君は、右衛門督の上にてものしたまふ。上の卷にしるしたれば、あたらしくも申し立てず。」とあるのは、こゝから下の卷たることを、明らかに現はしてゐるといふ。これも、まことに的確である。かく明らかに、上下兩卷が區別せられるのであるが、この兩卷が、同人の筆であるか、他人のであるか、これが問題の存するところである。

從來この著者は、赤染衛門と云はれてゐた。これは、南北朝頃にかく書いた日本紀私抄がある
と、和田英松、佐藤球兩先生がいはれてゐる。それから後々のものには、多く見えてをり、印本
目録の末にも「本云、斯榮花物語、赤染衛門述作。」と書いてあり、九卷本の目録にも「赤染衛門
記之。」と記してある。これを疑ふべきものとして考證したのが、安藤爲章である。爲章は、先づ
赤染の年齢の事から考證し初めた。その大意を云へば、藤原道隆が、赤染の妹に通つたことが
ある。その時の妹の代作を、赤染がしたのがある。それは、「入りぬとて人のいそぎし月影を出で
ての後も久しくぞ見し。」といふのであるが、この時、道隆は藏人の少將であつた。道隆の官歴を
考へると、ちやうど、このころは、貞元元年、二年の間に相當する。随つて、赤染衛門のこの代
作は、猶その年頃であらねばならぬ。この道隆の通ふほどの妹を持つてをり、かかる秀歌をよむ
ほどであるのを考へ合はせると、赤染は大抵二十歳前後であつたであらう。また家集に、大原少
將入道のなくなられたので、自分の命の長いのも心ほそく感じて、「いとへどもあまりうきみのな
がらへて人におくる、數も積りぬ。」と詠んだのがある。この大原少將入道は、土御門左大臣雅信
の男時敘で、萬壽元年に死去したのであつた。貞元元年、二年の頃を二十歳ばかりとすると、こ
のころ、赤染は六十歳餘七十に近いであらう。長和三年に夫匡衡が卒した。赤染は、この後しば

らくして尼になつたのであるから、六、七十の老尼であらねばならぬ。また家集に、曾孫の匡房が生れたのを祝つて、「雲のうへにのほらむまでもみてしがな鶴の毛衣年ふとならば。」と詠んでゐる。これは、長久二年のことである。この頃まで、赤染は健全に生存して居たのである。しかし、榮華は、寛治六年が終筆である。故に赤染が、この頃まで猶健全で生存してゐたとすると、百二十歳になる譯である。いくら健全でも老耄してしまつてゐるであらう。この人が、この大卷大冊を書き上げたといふのは、想像だもしいがたい事である。これによつても、この著者が、赤染でないことは確實である。

爲章は、つぎに、宮仕のことに就いて考證してゐる。それは、紫式部日記に、「丹波守の北の方を、宮、殿などのわたりには、匡衡衛門とぞいひける。」云々と記してある。紫式部は、上東門院に仕へて、赤染をよそ／＼書いて居るのを見ると、赤染は、道長の妻倫子に仕へたのであらう。それに夫匡衡の任國、尾張、丹波に誘はれ下り、夫が死んだ後に尼になつて里住をして居たのであるから、内、中宮、東宮、齋院、或は一品宮などの内々のことや、女房の衣の色あひまで詳しく知る事は出来ぬであらう。源氏は作物語であるから、どうにでも書けるが、これは、事實物語であるから、知らずしては書くことは出来ぬであらう。女の日記を借り集めて書いたと云は

れぬ事もなからうが、皆互に祕めあつたものであるから、それは不可能と思はれる。故にこの物語は、堀河院以後の人が、古の才女の記して置いたものを、抜き集めて作つたものであらう。更に、「浦々の別」に、伊周は二十三歳ばかりで、光源氏もかうもあつたかと思はれると云つてある。源氏物語は、長徳、長保の頃に出来て、寛弘の間に内、中宮に奉つたものと思はれるのに、赤染が、すぐにこゝに引用することは、あるべくもない。これによつても榮華は、必ず赤染以後の何人かの作でなくてはならない。又、「はつ花」に土御門殿の有様を記して、紫式部日記と、殆んど同一の文がある。赤染と紫式部とは、同時に歌才を争ふべき人であるから、式部の日記を、赤染が寫し取り、それを自著に長々と引用すべくもない。更に、同じ「はつ花」に帥宮は、濟時の女の中の君を妃とせられたが、御志が浅くなつて、和泉式部を御愛しなつたとある。赤染の家集を見ると、和泉の夫道貞とも、和泉とも、赤染は贈答までもして、いい閒柄とみえるし、和泉の妹に、赤染の子の舉周が愛を感じて、贈答をしてゐるなどの事がある。それであるのに、かく公になるべき物語に、それらの祕事をあばくことがあらうか。これも、作者の、赤染以外の人であるべき證であらう。「玉の村菊」に、今年東宮が、七にならせられる。長和四年に、御文始がある。そこに、學士には、大江匡衡が子の一條院の御時藏人であつた舉周をせられたと云ふのがあ

る。匡衡は、赤染の夫、舉周は赤染の子である。しかるに、他人らしく書くといふことはあるべくもない。これも、他の人の筆たるべき證であらう。「玉の臺」に、佛に無數の光明がかゝやいてゐるのは、「かの往生要集の文を思はず。」また、經藏の東の方から人が来て、「十方佛土之中以西方爲望、九品蓮臺間雖下品應足。」といふことを歌ふとある。往生要集の著者源信や、この文の作者慶滋保胤は、この時よりは前に卒去したのではあるが、赤染に、いくばくの先達でもない。同時の人の詞を引くのはどうであらうか。此の時、往生要集は、まだ赤染の手には入らなかつたであらう。さらに「御裳著」に、實方の歌を引いたのも、また後に、枕草子を引いたのも、同様である。ともに、赤染以後の人の作であるべき證である。爲章は、これら以外にも、赤染ならぬ證となるべきものを數多舉げてゐる中、ことに「根合」で、その主人であつた倫子の薨去を、「ことしの夏、鷹司殿の上失せさせたまひたれば、五節なども何のはえなくて過ぎぬ。」とのみ書いてゐるのは、あまりに冷淡な態度である。これも、赤染ならぬ確證であると云つてゐる。

爲章は、以上の諸證を舉げて、その物語の作者の赤染ならぬよしを説明してゐるのであるが、これによつて、赤染たらざる事を承認して、更にその他の人を探求して、藤原爲業を得たのは、伴信友である。信友は、例の比古婆衣に、「本朝書籍目錄」に、「世繼四十卷、自宇多天皇至堀河院

御宇、載君臣事、藤爲業作。」とあるのを擧げて、作者はかくあるによつて、爲業であらう。爲業は、尊卑分脈にも、藤原冬嗣の流に、「爲業、伊豆、加賀等守、皇太后大進、從五位下、出家法名寂然世繼作者。」とある。作者部類にも、藤爲業、木工頭爲忠子、淡路守法名寂然至保延五年とある。(寂然は爲業の弟頼業である。爲業は寂念と云つて居た。崇徳院の頃盛の人と見える。たゞし此の人の作といふのは、上篇か下篇か不明であるが、まづは上篇であらうと云つてゐる。これは極めて茫漠たる議論で、これを信ずるのは、たゞ書籍目録と尊卑分脈とを信ずる外はないのである。なほこれは他に的確な證據のあること、恰もこの人の上下篇分類の如きものがなければならぬ。故に此の論は、直ちに賛成することは出来ない。

しかしこゝに、また爲章の論據も案外薄弱で、それを以て、赤染ならぬ事を立證することが出来ぬといふ論がある。その詳細は、榮華物語詳解にあるのであるが、畧記すると、赤染が、倫子の女房であつて、夫匡衡について諸國に行き、その死後尼となつて居たから、宮中の事は、詳しく知らぬであらうと、爲章は云ふが、赤染は才女で歌人であるから、宮中にも召され、上東門院にも參つた事が、家集にもある。であるから宮中の事を知つても居るし、また女房達からも聞いたであらう。殊にその女の江侍従が、中宮威子に事へた事もあるから、種々の事を聞き知つたで